

平成10年度

## 児童生徒のボランティアマインドの育成

— 福祉体験活動を通して —

川崎市総合教育センター 児童生徒指導研究会議

# 児童生徒のボランティアマインドの育成

— 福祉体験活動を通して —

児童生徒指導研究会議

元吉 正典<sup>1</sup>      中西 伸夫<sup>2</sup>      石塚 全<sup>3</sup>      芦澤 潤<sup>4</sup>      大平 眞史<sup>5</sup>

## 要 約

近年ボランティア活動に対する関心が高まり、今後の社会の変化に対応して幅広い分野でその役割が期待されている。ボランティア活動は、地域社会を中心にあるいは広く社会において生涯を通して行われるものである。したがって学校教育では、その基礎となる心を育み、ボランティア活動へと発展させていくことが大切であると思われる。

そこで、本研究会議では「自ら他者や社会のために行動しようとする心」を「ボランティアマインド」と捉え、福祉体験活動を通してボランティアマインド育成の手だてを探りたいと考えた。

研究のはじめに、自己および他者への受容性・共感性、学校・家庭の受容的環境、ボランティア的活動経験などについて小学生・中学生・高校生430名を対象に意識調査を行った。その中で、受容性・共感性を支える因子が抽出され、それらがボランティア的活動経験と高い相関関係にあることが分かった。

次に小学校・中学校各1学級を対象として福祉体験活動を行い、児童生徒の活動を観察した。高等学校では、社会福祉団体主催の福祉体験活動に自主的に参加した生徒を観察した。着目した児童生徒については、意欲的な活動や他者を思いやる行動が見られるようになり、再調査によって意識の変化も確かめられた。また、学級全体では協力的で穏やかな様子が見られ、小学生ではボランティア活動に対する認識の高まりが示された。

キーワード：児童生徒指導，ボランティア，ボランティアマインド，福祉体験活動，受容性，共感性

## 目 次

I 主題設定の理由	54	(3) 受容性と共感性との関連	58
1. 研究の意義		(4) 学級・家庭の受容的環境	58
(1) ボランティア活動の広がり	54	(5) ボランティア的活動経験	58
(2) ボランティア活動とは	54	(6) ボランティア的活動経験と	
(3) 最近の児童生徒とボランティア活動	54	他の要因との関連	59
(4) 学校教育とボランティア		B. ボランティア体験活動の実践	60
マインドの育成	54	1. 小学校の実践事例	60
2. 研究の方法	55	2. 中学校の実践事例	62
(1) 研究のねらいと視点	55	3. 高等学校の実践事例	65
(2) 研究方法	55	C. ボランティア体験活動実践後の	
II 研究の内容	56	ボランティアにかかわる意識の変化	67
A. ボランティアにかかわる意識調査の		III 研究の成果と今後の課題	67
結果の分析	56	1. 研究の成果	67
1. 分析方法	56	2. 今後の課題	68
2. 調査結果と分析	57	おわりに	68
(1) 受容性について	57	参考文献・指導助言者	68
(2) 共感性について	57		

<sup>1</sup> 川崎市立西高津中学校教諭（主任研修員）

<sup>2</sup> 川崎市立大島小学校教諭（研修員）

<sup>3</sup> 川崎市立柿生中学校教諭（研修員）

<sup>4</sup> 川崎市立商業高等学校教諭（研修員）

<sup>5</sup> 川崎市総合教育センター研修指導主事

# I 主題設定の理由

## 1. 研究の意義

### (1) ボランティア活動の広がり

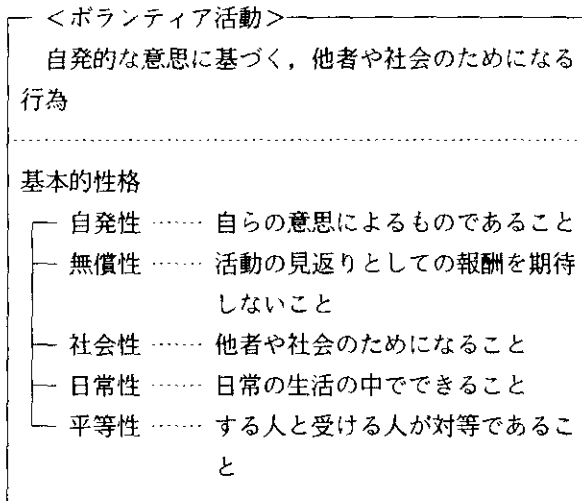
平成7年の阪神・淡路大震災以来、ボランティア活動に対する人々の関心が急速に高まってきた。最近では大きな災害や事故に対する救援活動だけでなく、社会福祉をはじめとして、教育、文化、スポーツ、環境保護、保健・医療、人権、平和、国際交流・協力など、日常の様々な領域でボランティア活動が行われている。また、若者から老人まで、年齢にかかわらず幅の広い範囲で大勢の人が参加しており、ボランティア活動の輪は確実な広がりをみせている。

かつては、ボランティア活動といえば、慈善的なものとして考えられ、持つ者から持たざる者への援助という捉え方が一般的であった。しかしながら現在では、ボランティア活動は、「してあげる」ものではなく、お互いに支え合い、生活を豊かにしていく相互的な活動と考えられるようになってきた。高齢社会の進展や社会教育・生涯学習の振興とも関連して、ボランティア活動に対するニーズは今後さらに高まってくると考えられる。

### (2) ボランティア活動とは

ボランティア volunteer という言葉は、ラテン語の voluntas (意欲) に由来し、「自発的に行動しようとする人」を意味する。したがって、ボランティア活動は自発的な活動であり、主体的に取り組むものである。そしてそれは、社会の課題に目を向けその解決のために行うものでもある。さらに、活動のプロセスで生まれる様々な人とのかかわりを通して、協調性や思いやり、感動する心など、豊かな人間性を育むことになると考えられる。

本研究会議では、様々な文献や社会福祉施設職員、ボランティア活動経験者からの聞き取り調査を基に、ボランティア活動を次のように捉えた。



### (3) 最近の児童生徒とボランティア活動

家庭における核家族化や少子化の進行、地域社会における連帯感の希薄化などにより、児童生徒が多様な人間関係をもつ機会が減少している。そのために、進んで他者とかかわり、円滑な人間関係を築くことが難しくなり、他者に対して無関心であったり、相手の気持ちを思いやることのできない児童生徒が増えている傾向にある。

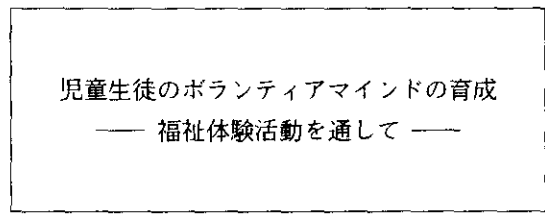
しかしながら、児童生徒がボランティア活動に取り組むようになると、その活動を通して多様な人間関係を経験し、それによって相手を思いやり、人のために意欲的に行動するようになっていくと思われる。そして、ボランティア活動は、第15期中教審答申で提言されている「生きる力」(「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」や「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための体力」)の育成に大いに寄与するものと考えられる。

### (4) 学校教育とボランティアマインドの育成

ボランティア活動は、地域社会を中心に広く社会の中で、生涯を通して行われるものであり、学校教育の中で行われるボランティア活動はその一部に過ぎない。また一方で、学校教育は意図的・計画的に営まれるものであり、ボランティア活動の基本的性格である自発性と矛盾が生じるのではないかというような意見もある。

しかしながら、児童生徒が生涯を通して地域社会で主体的にボランティア活動に取り組むためには、学校教育の中でその準備となる学習を行うことが必要であり、また、その学習を通してボランティア活動の基礎となる心を育成することができるのではないかと考える。

本研究会議では、まず、ボランティア活動の基盤となる「自ら他者や社会のために行動しようとする心」を、「ボランティアマインド」として捉えた。そして、学校教育の中で「ボランティアマインド」の育成を図るために何が必要なのか、体験を中心とした活動を通してその支援の手だてを探りたいと考え、次のように研究主題を設定した。



## 2. 研究の方法

### (1) 研究のねらいと視点

他者を思いやり、自ら他者や社会のために行動しようとするボランティアマインドをもつ児童生徒を育成するために、どのような支援が必要なのかを探ることを研究のねらいとして、次のような視点を考えた。

- ① ボランティアマインドには、自己および他者への受容性が深くかかわっている。
- ② ボランティアマインドには、他者に対する共感性が深くかかわっている。
- ③ ボランティアマインドの形成には、児童生徒に対する学級や家族の受容的環境がかかわっている。
- ④ 他者を尊重し、ボランティアマインドをもって行動するようになるには、体験的活動が有効である。
- ⑤ 体験的活動後の振り返りの活動は、ボランティアマインドを強化する。

### (2) 研究方法

本研究は、調査研究と実践研究の二つの側面をもち、次の3つの部分から成っている。

- A. ボランティアにかかわる意識調査
- B. ボランティア体験活動の実践
- C. ボランティア体験活動実践後のボランティアにかかわる意識の変化

#### A. ボランティアにかかわる意識調査

ボランティアにかかわる意識や活動経験を調べることによって、児童生徒の実態を把握し、ボランティアマインド形成にかかわる要因を探る。

##### ① 調査内容

ボランティア活動は、他者や社会に対して行われる行為である。児童生徒が自分の周囲の他者や社会について関心をもち、認知し、理解し、行動しようとする過程では、受容性や共感性といった要素が重要な役割を果たしていると考えた。

そこで、先行研究や参考文献を参照し、まず受容性・共感性の2つ要因について調べることにした。さらに、ボランティアマインドの形成に影響を与えていると思われる学級や家庭の受容的環境についても調べることにした。また、様々なボランティア的活動（家族や友人に対する援助活動などを含む）の経験の有無と児童生徒のボランティア活動に対する認識についても調べることにした。

#### 【受容性について】

「受容性」とは、「他者から受け入れられている自分を自分が大切にするとともに、他者をありのままに受け入れることであり、他者からの受容（受容感）、自己への受容（自己受容）、他者への受容（他者受容）の三つの要素によって構成されている。」<sup>1)</sup>

この調査にあたっては、加藤 他（川崎市総合教育センター研究報告、1997）による自己受容尺度を基に若干の修正を加えて作成した25項目の質問紙を用いた。

#### 【共感性について】

「共感性」とは、「他者の立場や情動的反応を知覚し理解するとともに、その際に相手もつであろう同じ文脈上での感情を共有する能力」<sup>2)</sup>で、認知的側面と情動的側面の両方を包含している。

この調査にあたっては、加藤・高木（筑波大学心理学研究、1980）による質問項目を中学生・高校生向けに修正し、新たな質問項目を追加して作成した27項目の質問紙を用いた。

#### 【学級・家庭の受容的環境について】

学級・家庭の受容的環境について各5項目作成し、回答した各項目の状況について、さらにそれが「望ましいかどうか」評価する質問を設定した。

#### 【ボランティア的活動の経験・認識について】

人のためになると考えられる行動について24項目作成し、各項目について経験の度合いとそれをボランティア活動として認識するかどうかという質問を設定した。

### ② 調査の実施

- 調査期間 平成10年4月下旬～5月上旬
- 調査対象 市内小学校・中学校・高等学校各1校  
小学校6年生2クラス  
中学校2年生4クラス  
高等学校1・2・3年生各2クラス  
計430名

#### ○ 調査形式 自記式集合調査

- 問1 性別、学年、きょうだい、  
祖父母との同居経験、小動物の飼育経験
- 問2 受容性項目（5件法） 25項目
- 問3 共感性項目（5件法） 27項目
- 問4-1 学級・家庭の受容的環境 10項目  
（5件法）
- 問4-2 受容的環境への評価
- 問5-1 ボランティア的活動経験 24項目  
（4件法）
- 問5-2 ボランティア活動としての認識

<sup>1)</sup> 小林 尉 「児童生徒の人権に関する意識の研究」 滋賀県総合教育センター研究紀要 1993年 P. 28

<sup>2)</sup> 繁多 進 『社会性の発達心理学』 1991年 P. 201

## B. ボランティア体験活動の実践

### ① 小学生・中学生を対象とした体験活動

小学校6年生・中学校2年生、各1クラスを対象に社会福祉施設訪問を中心とする福祉ボランティア体験活動を実施した。その際、ボランティア活動にあまり関心がないと思われる児童生徒の中から着目児童生徒を各1名抽出し、体験活動の観察を通して、ボランティアマインド育成のための支援の手だてを探ることとした。

### ② 高校生を対象とした体験活動

社会福祉協議会主催の福祉ボランティア体験活動に自主的に参加した生徒の中から高校2年生の女子1名を着目生徒とし、体験活動の観察を通して、ボランティアマインド育成のための支援の手だてを探ることとした。

## C. ボランティア体験活動実践後のボランティアにかかわる意識の変化

Bのボランティア体験活動を行った小学校6年生・中学校2年生各1クラスの児童生徒と高校2年生の生徒1名を対象に、Aの意識調査と同じ調査を実施し、体験前と体験後の意識の変化を調べることにした。

## II 研究内容

### A. ボランティアにかかわる意識調査結果の分析

小学校6年生68名、中学校2年生134名、高校1・2・3年生228名、合計430名を分析の対象とした(表1)。

表1. 学年別・性別一覧

	男	女	合計
小6	38 55.9	30 44.1	68人 15.8%
中2	75 56.0	59 44.0	134人 31.2%
高1	26 33.8	51 66.2	77人 17.9%
高2	25 33.3	50 66.7	75人 17.4%
高3	30 39.5	46 60.5	76人 17.7%
合計	194 45.1	236 54.9	430人 100.0%

表2 受容性の因子分析結果 (高校生224名) 4因子指定 VARIMAX 回転後

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
<b>【自信】</b>					
みんなの前でも自分の意見をはっきり言う	.582	.212	.162	.345	.529
人の言うことに左右されやすい	-.513	-.263	.152	.123	.371
正しいと思ったことでもなかなか言いだせない	-.470	-.227	.073	.052	.281
人にたよらなくてもやっていける	.440	.253	-.010	-.042	.260
初めて会った人とでも仲よくなれる	.408	-.006	.340	.109	.294
自分に対して不満なことが多い	-.390	-.072	-.088	.209	.209
自分にはよいところが多い	.363	.299	.273	-.049	.298
自分のことは自分で決める	.338	.264	.147	.084	.212
<b>【実行】</b>					
やると決めたことは最後までやりとおす	.278	.612	.106	.073	.468
私はよく頑張っている	.233	.563	.143	-.069	.397
自分の目標(めあて)をもって実行しようとする	.115	.529	.135	.051	.314
たとえ失敗しそうなことでも挑戦する	.386	.473	.036	.045	.376
<b>【安定】</b>					
私はしあわせだと思う	-.007	.077	.605	-.017	.372
人とのつきあいがよい	.426	.054	.595	.039	.540
自分は友だちから大切にされている	.136	.178	.548	-.038	.352
自分は家族から大切にされている	-.256	.070	.524	-.117	.358
<b>【統制】</b>					
人の気持ちをきずつけてしまう	-.133	-.046	-.204	.603	.425
自分の気持ちがおさえられない	-.094	.215	-.034	.541	.349
よく考えないで行動する	-.032	-.300	.190	.505	.382
人を自分のいいなりにする	.001	-.054	-.035	.483	.237
人の言うことにすぐに反対する	.118	.113	.028	.438	.219

## 1. 分析方法

受容性、共感性、学級・家庭の受容的環境の選択肢については、「はい」「どちらかというとはい」「どちらともいえない」「どちらかというといいえ」「いいえ」の順に1点から5点を与えた。ボランティア的活動経験の選択肢については、「よくやったことがある」「ときどきやったことがある」「1~2回やったことがある」「やったことはない」の順に1点から4点を与えた。多変量解析(因子分析)にあたっては、項目内容の理解度の深さ、母集団の大きさを考慮して、高校生の回答を採用することとした。

受容性の項目および共感性の項目に対しては、主因子法(VARIMAX 回転)による因子分析を行った。繰り返し分析した結果、受容性では4因子、共感性では2因子が抽出された。各因子の負荷量の高い項目によって因子の命名を行った後に、負荷量の高い項目を単純に加算したものを各因子の尺度得点(項目平均値)とした。なお、この際尺度得点の数値の高いものがその因子の意味を示すように数値を変換した。

学年、男女間の違いを見るために分散分析を行うとともに、尺度得点分布をもとに30%をめどとして上・中・下位群を構成して尺度間の関連や他の項目との関連を検討した。

## 2. 調査結果と分析

### (1) 受容性について (表2)

当初受容性を構成する「自己受容」「他者受容」「受容感」の3つの因子を想定していたが、因子分析を行った結果、受容性を支える内容の次の4つの因子が抽出された。

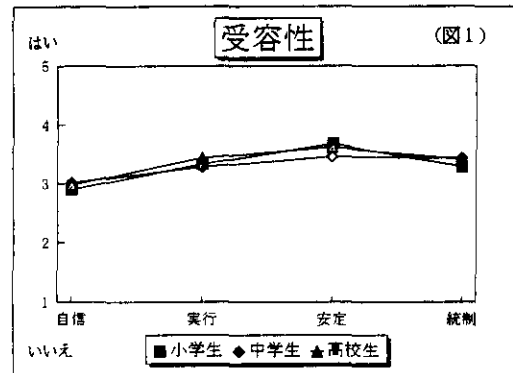
第1因子に大きな負荷量を示したのは、「みんなの前でも自分の意見をはっきり言う」「人の言うことに左右されやすい」(反転)「正しいと思ったことでもなかなか言いだせない」(反転)「人にたよらなくてもやっていける」など、自分に自信をもって表現したり行動したりすることにかかわる項目なので『自信因子』と命名した。

第2因子は、「やると決めたことは最後までやりとおす」「私はよく頑張っている」「自分の目標をもって実行しようとする」など自分の目標に向かって意欲的に行動しようとする項目なので『実行因子』と命名した。

第3因子は、「私はしあわせだと思う」「人とのつきあいがよい」「自分は友だちから大切にされている」など対人関係が良好で精神的に安定した状態を示す項目なので『安定因子』と命名した。

第4因子は、「人の気持ちをきずつけてしまう」「自分の気持ちがおさえられない」「よく考えないで行動する」など、自分の気持ちや行動を統制することにかかわる項目なので『統制因子』と命名し、自分の気持ちや行動を統制できる方が点数が高くなるように尺度得点を変換した。

この4因子を受容性の下位尺度とし各尺度の項目平均値を比較すると、「安定」が最も高く「自信」がやや低



い傾向を示した。校種別に比べてみると(図1)、中学生の「安定」がやや低いものの同じような傾向を示し、大きな差はない。このことから、今回調査した児童生徒は全体として友達や家族との円滑な関係から安定した情緒を保ち、自分の気持ちや行動を統制できているとされていることがうかがわれる。また目標に向かって意欲的に行動しようとするが、自信をもって発言したり自立して行動したりすることは苦手だと思っている様子が浮かんでくる。

男女の差をみると、「自信」では男子の方が上回っているが、「安定」「統制」では、女子の方が高くなっている。このことから、男子は女子に比べて自分に自信をもち、はっきりとした態度をとる反面、情緒がやや不安定で自分の気持ちをコントロールしにくいという様子が見られる。一方女子は、自分に自信をもって行動することは少ないが、情緒的に安定していて気持ちや行動が落ち着いているという傾向がみられる。

### (2) 共感性について (表3)

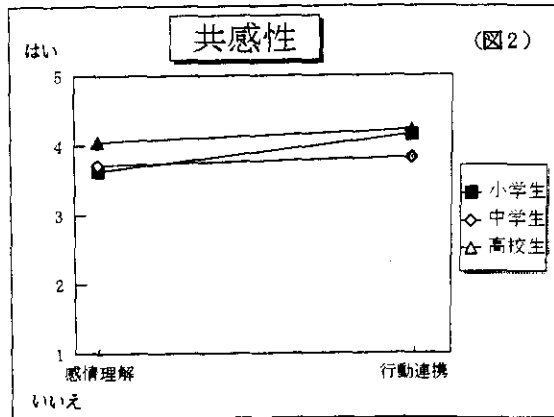
第1因子は、「人がうれしくて泣くのを見ると、しら

表3 共感性の因子分析結果 (高校生224名) 2因子指定 VARIMAX 回転後

項目	因子1	因子2	共通性
<b>【感情理解】</b>			
人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる	.737	-.190	.579
他の人の涙を見ると、かわいそうというよりは、いやな感じがする	.609	-.230	.423
まわりの人が悩んでいても気にならない	.579	-.410	.503
クラスのために一生懸命に活動する人の気持ちが理解できない	.566	-.308	.415
行事などでまわりが盛り上がっていても、関心がない	.556	-.316	.409
友だちが悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる	.518	-.308	.364
歌を歌ったり聞いたりすると、楽しくなる	-.481	.279	.310
友だちがどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない	.466	-.153	.241
テレビドラマを見ていてまわりの人がすすり泣くのを見ると、おかしくて笑いたくなる	.411	-.163	.195
愛をテーマにしたドラマやアニメに感動しやすい	-.378	.295	.230
他の人が何かのことで笑っていても、それには興味はわからない	.356	-.193	.164
<b>【行動連携】</b>			
動物が苦しんでいるのを見ると、助けたいと思う	-.137	.587	.363
プレゼントをした時、もらった人の喜ぶ様子を見ると、うれしくなる	-.188	.568	.358
一人暮らしの老人を見ると、寂しいだろうと思う	-.283	.509	.339
仲間に入れず一人ぼっちでいるのを見ると、腹が立つ	-.214	.497	.292
友だちがいじめられているのを見ると、腹が立つ	-.198	.427	.222
人にとって嫌なことを伝える時は、自分も嫌な気持ちになる	-.051	.418	.178

けた気持ちになる」「他の人の涙を見ると、かわいそうというよりは、いやな感じがする」など、マイナスの内容が多いが、相手の感情を理解しているかどうかを表す項目なので、『感情理解因子』と命名した。

第2因子は、「動物が苦しんでいるのを見ると、助けたいと思う」「プレゼントをした時、もらった人の喜ぶ様子を見るとうれしくなる」など、相手の感情を理解しそれが行動とつながる様子が考えられる項目なので『行動連携因子』と命名した。



各尺度の項目平均値を比較してみると、「感情理解」よりも「行動連携」の方により肯定的な回答をする傾向がみられた。このことから、今回調査した児童生徒は相手の感情を理解しながら、さらにそれが行動につながるような気持ちをもっていると考えられる。

校種別に比べてみると(図2)、いずれも「行動連携」が「感情理解」を上回っているが、小学生ではその差が大きく「感情理解」が最も低い。これは、小学生では相手の気持ちを細やかに十分理解する力はないが、見て感じたことをそのまま行動に移しやすい特徴を示していると思われる。中学生では、「感情理解」は小学生よりもやや高いものの、「行動連携」は最も低い。中学生になると相手の気持ちを理解する力は高くなるが、そのことからすぐに行動に移るのではなく、周囲の状況や自分がどう見られるかというようなことを考えてしまい、行動に移しにくいものと思われる。

次に男女の差をみると、「感情理解」「行動連携」ともに女子の方が高く、特に「感情理解」についてはその差が大きい。これは、女子の方が男子より感情が細やかで相手の感情を理解しやすいものと考えられる。

### (3) 受容性と共感性との関連

受容性、共感性の各尺度の関連を、上・中・下位群についてみてみると、受容性の「実行」「安定」と共感性との関連が非常に高いことがわかる(表4-1~4)。また受容性の「統制」と共感性の「感情理解」との関連もみられた。このことから、目標をもって最後までやり遂げようという「実行力」と、家族や友人との円滑な人間関

係に基づく精神的な「安定」が、相手の気持ちを理解し共有しようという共感性につながるものと考えられる。

表4-1 受容性と共感性 (%)

受容性実行尺度	共感性感情理解尺度			人数
	上位	中位	下位	
上位群	52.6	34.0	13.5	156
中位群	41.4	39.6	18.9	111
下位群	21.1	36.1	42.5	147

(p<.001)

表4-2 受容性と共感性 (%)

受容性実行尺度	共感性行動連携尺度			人数
	上位	中位	下位	
上位群	51.3	34.0	14.7	156
中位群	37.2	34.5	28.3	113
下位群	22.5	31.8	45.7	151

(p<.001)

表4-3 受容性と共感性 (%)

受容性安定尺度	共感性感情理解尺度			人数
	上位	中位	下位	
上位群	57.6	31.1	11.3	151
中位群	30.9	44.7	24.3	152
下位群	22.0	31.2	46.8	109

(p<.001)

表4-4 受容性と共感性 (%)

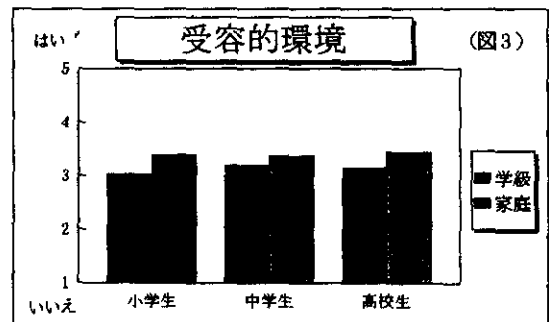
受容性安定尺度	共感性行動連携尺度			人数
	上位	中位	下位	
上位群	56.7	29.3	14.0	150
中位群	30.8	45.5	23.7	156
下位群	21.4	21.4	57.1	112

(p<.001)

### (4) 学級・家庭の受容的環境

学級の受容的環境、家庭の受容的環境について、それぞれの項目の平均値を校種別に比較してみると(図3)、今回調査した児童生徒は、小学生でやや学級の受容的環境の値が低い、学級・家庭共に校種による違いはそれほどみられない。

男女の差をみると、学級・家庭共に女子の方が高く、男子よりも女子の方が学級や家庭の環境が受容的であると感じているようである。



### (5) ボランティア的活動経験

ボランティア的活動経験について、24項目を活動の対象別に次の4つに分類してみた。

#### 【高齢者や障害者に対する活動】

- 「老人ホームでお年寄りの世話をする」
- 「横断歩道で困っている目の不自由な人を助ける」
- など5項目

#### 【不特定な人々に対する活動】

- 「共同募金や福祉のキャンペーンで募金する」
- 「災害にあった地域へ、文房具や本などを送る」
- など5項目

#### 【地域や環境に対する活動】

- 「町内会や自治会の行事に参加する」
- 「公園や河川敷などのクリーン作戦に参加する」
- など5項目

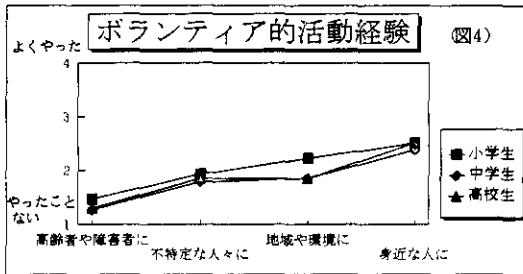
【身近な人に対する活動】

- 「病気で寝ている家族の世話をする」
- 「近所の子どもの世話をする」
- 「休んだ友達のためにノートをとったりする」

など9項目

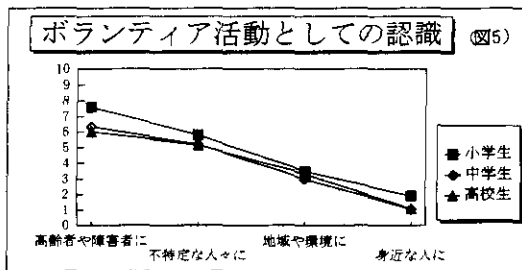
24項目の回答を基に、4つの分類それぞれの平均値を求め、校種別に比較してみると(図4)、全体的に同じような傾向を示し、【高齢者や障害者に対する活動】の経験が少なく、【身近な人に対する活動】の経験が多くなっている。これは、お年寄りと同居している者が少なく「高齢者」に接する機会があまりないこと、それに比べて身近な家族や友人に対しては、接する機会も多く気軽にできるということが考えられる。また【地域や環境に対する活動】では、小学生の経験が高く、中学生、高校生で低い。これは、当該小学校でクリーン作戦を実施していることや、子供会などを通して小学生が地域の活動に参加する機会が多いためと考えられる。

また、男女の差をみると、【身近な人に対する活動】の経験で女子が男子よりも多くなっている。これは女子の方が男子より共感性が高く、身近な人に対する思いやりやいたわりの気持ちをもちやすく、またそれを素直に行動に移しやすいからではないかと思われる。



次に、ボランティア的活動をボランティア活動として認識しているかどうかについて、「ボランティア活動だと思う」という回答に1点を与え、分類ごとに平均値を求め、その数値を10倍してみると(図5)、「ボランティア的活動経験」と全く正反対の傾向がみられる。児童生徒は、【高齢者や障害者に対する活動】をボランティア活動と認識しているが、【身近な人に対する活動】については「ボランティア活動」とはあまり考えていない。

このことから、児童生徒は、ボランティア活動を身近



な人に対してではなく、弱い立場にいる人や困っている人に対する活動と捉えている傾向がみられる。日頃行っているボランティア的活動経験と比べて、本来のボランティア活動というものをもっと社会に目を向けたものであるという認識がうかがえる。

校種別に比べても、ほぼ同様の傾向がみられるが、小学生はボランティア活動を少し広く捉えているのに対して、中学生・高校生はやや限定した捉え方をしているようである。男女の差はほとんどみられない。

(6) ボランティア的活動経験と他の要因との関連

① 受容性との関連

受容性の4尺度の上・中・下位群とボランティア的活動経験の度合いの高・中・低との関連をみると、いずれの尺度とも有意差が見られた(表5-1, 2)。特に、受容性の「実行」「安定」については、尺度得点の高い者ほどボランティア的活動経験が高く、強い相関がみられた。

このことからボランティア的活動経験には「受容性」が大きく関連し、中でも目標に向かって成し遂げようとする「実行」と、周囲との円滑な人間関係に基づく精神的な「安定」が強く関係していると考えられる。

表5-1

受容性とボランティア的活動体験 (%)

受容性	ボランティア的活動体験			人数
	高	中	低	
上位群	50.0	34.2	15.8	148
中位群	33.3	42.2	24.5	102
下位群	18.7	31.3	47.9	134

(p<.001)

表5-2

受容性とボランティア的活動体験 (%)

受容性	ボランティア的活動体験			人数
	高	中	低	
上位群	44.9	36.9	15.8	138
中位群	30.8	44.5	24.7	146
下位群	24.5	27.7	47.9	94

(p<.001)

② 共感性との関連

共感性とボランティア的活動経験との関連をみみると、2つの尺度とも高い有意差がみられた(表6-1, 2)。

このことから、相手の感情を理解し相手のために行動しようとする気持ちをもつこと、すなわち共感性の「感情理解」と「行動連携」が、ボランティア的活動経験に強くかかわっていると考えられる。

表6-1

共感性とボランティア的活動体験 (%)

共感性	ボランティア的活動体験			人数
	高	中	低	
上位群	50.3	36.1	13.6	146
中位群	25.5	48.5	26.5	102
下位群	20.8	31.3	47.9	134

(p<.001)

表6-2

共感性とボランティア的活動体験 (%)

共感性	ボランティア的活動体験			人数
	高	中	低	
上位群	47.9	43.6	8.6	140
中位群	35.9	35.9	28.1	128
下位群	14.5	36.4	49.1	110

(p<.001)

以上のことから、「実行」と「安定」によって支えられた受容性と、他者に対する共感性がボランティア活動の基盤となっていることがわかった。

この他、学級・家庭の受容的環境、祖父母との同居経験、小動物の飼育経験との関連も調べたが、有意な差は認められなかった。

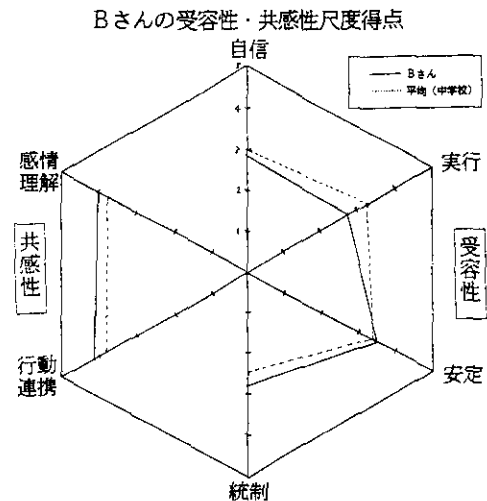
## B. ボランティア体験活動の実践

### 1. 小学校の実践事例

○着目児童Aさんについて〔小学校6年生、女子〕

祖父母との同居の経験はなく、事前のアンケートにはボランティア活動に対して、「関心がない」と答えている。事前学習でのお年寄りへのインタビューでは、自分から進んで活動していた。普段は、限られた友達と話をしたり絵を描いたりして過ごすことが多い。

調査結果の中から「受容性・共感性尺度得点」をみると、受容性の「実行」が平均より低い、「安定」「統制」は平均を上回っている。共感性は「感情理解」「行動連携」ともに平均に近い。このことから情緒に関しては安定し共感性もあるが、思ったことを実行することはやや苦手という様子うかがわれる



授業実践から 小学校6年生「社会科」

単元名 「ボランティアって何？」

(11時間)

#### 【活動計画】

- 身近にいるお年寄りの暮らしについて話し合う。…………… (1時間)
- 身近なお年寄りへのボランティア活動について調べる計画を立てる。…… (1時間)  
(調べる活動は時間外で実施)
- 調べた内容をグループごとに方法を決めて発表する。…………… (1時間)
- Iホームを見学して、職員の話聞く。…………… (2時間)
- Iホームを見学した感想を文にまとめる。…………… (1時間)
- Iホームのために、自分たちにできることを考え、話し合う。…………… (1時間)
- Iホームでのデイサービスやふれあい縁日の準備作業をする。…………… (1時間)
- Iホームでふれあい縁日の準備、配食サービスの手伝いをする。…………… (2時間)

○ 「ふれあい縁日」〔会場：T養護学校、任意参加〕…………… (時間外)

- お年寄りや障害のある人のために、自分たちができることについて考え、話し合う。…………… (1時間)

#### 【活動の経過と支援】

◎「ふれあい縁日」までのAさんの様子

Aさんは、まじめでどちらかというとおとなしい女の子である。1時間目の「身近にいるお年寄りの暮らしについて話し合う」では、祖父母との同居経験がないためか、自分の問題として捉えることができず、積極的に発言することはなかった。しかし、その後老人ホームなどを調べる学習では、お年寄りに積極的にインタビューをし、Iホームの職員の話なども熱心に聞いていた。そうした活動を通して、お年寄りに対する関心が高まってきたように思われる。

Iホームでの陶芸活動では、最初はお年寄りに聞きに行くこともできなかった。調査結果で、受容性の「実行」が低いことから、なかなか行動に移せないことが理解できる。しかしこの時は、途中から教えてくれるお年寄りに自分から声をかけるようになった。

< Iホームを訪問したときのAさんの感想 >

私はデイサービスでいろいろな人たちとねん土をこねたりお皿を作ったりして、とてもすばらしい体験ができました。そしてデイサービスにいる人たちともしゃべったりして、ふれあいのわをひろげたような気がしました。またいつか機会があったらIホームに行って、もっとたくさんの人たちと、いろいろな物をつくってみたいです。ありがとうございました。

◎「ふれあい縁日」に参加したときのAさんの記録

Aさんはふれあい縁日でも、最初は家の都合で参加するかしないか迷っていた。そこで、「友達も参加するし、お店も出ていて楽しいよ」と声かけをしてみたが、「行けたら行きます」という返事で、参加の意志が明確ではなかった。しかし、当日は妹を連れて参加した。

主 な 活 動	支 援	着 目 児 童 A さ ん の 様 子
<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に作った縁日のしおりを、来ているお年寄りに配付する。</li> <li>・任されたしおりを配り終わり、担任へ報告し追加のしおりをもらい再び配付する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「よく来たね。妹さんも連れてきたの。」と、来たことを受け入れる言葉かけをした。</li> <li>・「しおりをもらっていない人を捜して差し上げてください。」とお年寄りとおふれあいやすい仕事を頼んだ。</li> <li>・「ありがとうございます。まだしおりがあるけど、配ってもらえますか。」と頼み、<u>仕事への意欲を高めようとした。</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★お年寄りを探して、同じように手渡すが、<u>渡された人の様子を見ることはない。</u>お年寄りへ声をかけるとき戸惑う様子がうかがえ、<u>事務的に届けていた。</u></li> <li>★しおりを受け取ると、走って移動してお年寄りを見つけて、渡して回った。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字並べゲームの手伝いをする。</li> <li>赤い色で、「う」の文字を首から下げている人を会場から見つけて連れてくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>活動の様子を認めていること</u>を伝え、<u>次の活動へ意欲をつなげるために</u>、「車椅子を押すのは、難しくなかった？」と声かけた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★友達と一緒にまわりを見回し、「う」の字を下げているおじいちゃんを見つけ、よーい、どんの合図で走って同じ「う」の字を下げていた<u>車椅子のおじいちゃんの所</u>に行き、席まで連れていった。</li> <li>★はじめ緊張気味で、表情も固かった。席まで連れて戻ってきたときには、<u>ほっとした表情</u>を見せた。担任の声かけに、ただうなずいた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・フォーダンスの練習をする。</li> <li>・フォークダンスをする</li> <li>・ダンスが終わり記念撮影をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入ろうか入るまいか迷っている様子を感じたので、きっかけをつくるために「みんなで踊ろうね。」と声かけた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★友達二人と輪の中に入ろうとしたが、もう一人の友達を探し、四人がそろってから少しずつ輪に近づく。その場で、<u>一番早く踊りの練習を始めた。</u></li> <li>★友達と手をつなぎ踊り始めた。</li> <li>★パートナーチェンジがあり、次の子とは手をつながない。小さい子に手を出されてから、手をつなぐようになる。その後、担任やボランティア、お年寄りとチェンジする相手と手をつなぎ挨拶をしてにこやかにダンスを踊った。</li> <li>★ポーズを注文され、他の子はほとんどしていなかったが、<u>両手をあげてひじを軽く曲げてグーを出した。</u></li> </ul>

<「ふれあい縁日」に参加したときのAさんの感想>

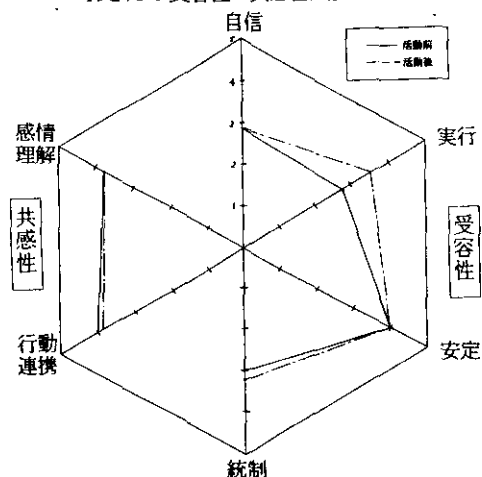
ゲームのじゅんぴやおてつだいは大変だったけど、おとしよりの人たちや障害のある人たちとゲームをしたのしかった。くるまいすをおすときは、はじめてだったのでたいへんでした。

◎活動後のAさん

再調査を実施し「受容性・共感性尺度得点」について体験活動の前と後とを比べてみると、受容性の「実行」と「統制」で数値が上昇していることがわかる。共感性については、いずれもやや下がっている。

活動後のAさんの様子としては、修学旅行や卒業アルバムの実行委員になるなど、様々な活動に積極的に取り組むようになった。2学期の学習発表会では、仲よしの友人とは別に自分で劇を選び、楽しく発表会を終えた。花や野菜への朝の水やりなど、目立たなくて根気のいる仕事も行い、周囲の友達からも頼りにされるようになった。

Aさんの受容性・共感性尺度得点

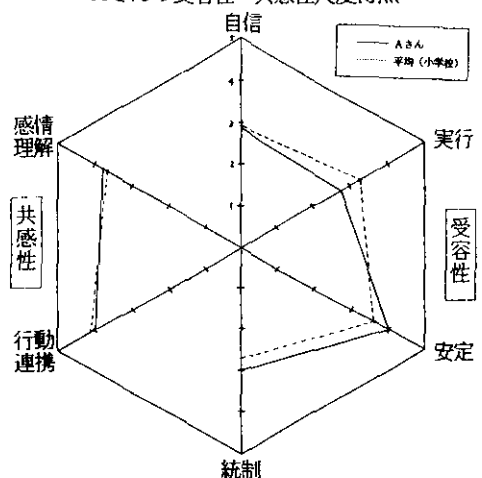


2. 中学校の実践事例

○着目生徒Bさんについて [中学校2年生, 女子]

K老人ホームに訪問する話が出たときに、「えー、行くの。」と消極的な反応を示した。これまで限られた友達とグループを作ることが多く、他の友達と協力することが少なかった。調査結果の中から「受容性・共感性尺度得点」を見ると、今回調査した中学生の中では、受容性の「自信」「安定」「統制」は平均あるいはそれ以上であるが、「実行」はやや低い。共感性は「感情理解」「行動連携」ともに平均より高い。このことから、情緒に関しては安定し、相手を思いやる気持ちはあるようだが実際に行動に移す時に円滑にいかないことがあるのではないかと考えられる。

Aさんの受容性・共感性尺度得点



授業実践から 中学2年生 「特別活動」「道徳」  
 「Kホームでボランティアをしよう」 (11.5時間)

【活動計画】

- 高齢社会の現状や今後の動向について考える。  
 特別養護老人ホームのKホームへ訪問することについて話し合う。…………… (1時間)
- Kホームの園長先生や寮母さんの話を聞き、車椅子の介助体験をする。…………… (1時間)
- Kホームで第1回のボランティア体験活動をする。…………… (3時間)  
 ・洗面台磨き4人、おむつ巻き10人、配茶9人、居室清掃9人、エプロンたたみ4人
- Kホームで体験した感想をまとめる。…………… (1時間)
- 2回目の訪問で、自分たちにできることを考え話し合う。…………… (0.5時間)

- Kホームで第2回目のボランティア体験活動をする。…………… (3時間)  
 ・おむつ巻き11人、納涼祭のポスターの色塗り4人、納涼祭の花作り19人  
 ・訪問させてもらったお礼に、歌を披露する。

- Kホームで第3回のボランティア体験活動をする。…………… (2時間)  
 ・生け花作り14人、誕生会の会場作り10人、おむつ巻き9人 ・歌を一緒に歌う。

【活動の経過と支援】

◎事前の学習

事前学習として、Kホームの寮母さんの話を聞き、車椅子の介助体験を行ったが、寮母さんの話の時はあまり興味を示さず落ちつかない様子であった。車椅子の体験になると意欲的になり、「向こうの広場でやってもいいですか」など前向きに取り組む姿勢が見られた。後でわかったことだが、以前弟が怪我をした時、車椅子を押した経験があることが意欲的な活動に結びついたようである。この時間の終わりの方では、寮母さんや園長先生の話を食べるような態度で集中して聞くようになった。自分の過去の経験が今の経験につながり、実際に体験することによって関心が高まってきたように思われる。

◎1回目のボランティア体験活動

受容性の「実行」がやや低かったBさんは、1回目のボランティア体験活動では、施設見学の時に常に後ろの方を歩き、説明に耳を傾けるというよりも話をしていいることの方が多かった。このような時には、活動を通して興味を高める支援が必要である。実際に、配茶の仕事を始めてしばらくすると、お年寄りと気楽に話せるようになり笑顔で活動していた。また、廊下で、車イスに座っていたお年寄りに突然「靴をはかせて」と頼まれた時には、どうしたらよいかと戸惑っていたが、なんとか靴を履かせてあげることができた。その時「ありがとう」と言われたことを、Bさんは友達や担任にうれしそうに報告していた。このような時に、自分の変化や体験の価値に気づくように言葉をかけ、支援することが大切である。

◎2回目のボランティア体験活動

2回目の体験活動では、手作りのミニわらじをくれるというお年寄りの部屋にわらじを取りに行くことになった。希望者を募ったところ、Bさんは進んで名乗り出してお年寄りの部屋に行き、お年寄りの話を聞いたり話をしたりした。その時Bさんは、わらじの一つを校長先生にあげようという提案をした。1回目の体験活動では見られなかった積極的な行動である。「実行」という点で高まりが見られたように感じた。

今回の活動では、お年寄りとふれあう時間がもてるように、化粧紙を使って、納涼祭の飾りに使う花を一緒に作る作業に取り組んだ。

主 な 活 動	支 援	着 目 生 徒 B さ ん の 様 子
<ul style="list-style-type: none"> <li>・納涼祭の花の作り方を聞く。</li> <li>・お年寄りと一緒に花を作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達同士かたまって座っていたので、お年寄りとのふれあいがしやすいように、始めは担任が、次には寮母さんが、「<u>おばあちゃんのそばに行つて。</u>」と促す。</li> <li>・担任は、花作り、ポスター作り、おむつたたみなど、生徒の活動を観察しながら励ましや評価の声かけをした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★前回仲よくなったバンザイが好きなお年寄りと一緒にバンザイをして笑顔を見せる。</li> <li>★担任が言っても聞き流していたが、<u>寮母さんが言う</u>と仲よしの友達を見ながら、「二人で行ってもいいですか。」と聞いて、<u>素直に移動した。</u></li> <li>★花を折りながら、「小さいころ、何して遊んだの。」と声をかけた。聞こえなかったのか、反応がなかったが、そのことは気につけない様子で「折り紙、好き」と聞いた。</li> <li>★話しながら、<u>広げるだけになった花を静かにお年寄りの前においた。</u></li> <li>★寮母さんが近づいたときに、「<u>おばあちゃん、うまいよ。</u>」と教えた。</li> <li>★近くの男子が自分だけで作業しているのを見て、「おじいちゃんに、教えてあげなよ。」と言った。</li> <li>★作業が進んで、みんなでハサミを使い回していたが寮母さんに、「ハサミもう一本ありますか。」と話しかけた。持ってきてくれたら、「はい、ありがとうございます。」とはっきり言った。</li> <li>★お年寄りの顔をのぞきこんではさかんに話しかけてい</li> </ul>

	<p>・担任が寮母さんに、「おばあちゃん、花を開くのが上手ですよ。」とBさんにも聞こえるように教えた。</p>	<p>た。</p> <p>「ゆっくりでいいから、やろうよ。」</p> <p>「色々な、色があるね。」</p> <p>「わたし、この色（水色を指さして）が好き。」</p> <p>「お花たくさん作らないと、お祭りのときに困っちゃうね。」</p> <p>「おばあちゃん、できそう。」</p> <p>「おばあちゃんって、かわいい色（ピンク）が好きだね。」</p> <p>★「ほめられたよ。これ（二つ）も開いてね。」と言って、満足そうな笑顔を見せた。</p> <p>★お年寄りの手が進まなくなると、「疲れた？少し休みな。」「だいじょうぶ。」と顔をのぞきながら、体調を気づかう言葉を言った。</p> <p>★作業が終わり、「お花、持って帰る。」と聞いた時、寮母さんが来て赤い花を渡そうとすると「おばあちゃんはピンクが好きなの。」と言ってピンクに代えた。</p> <p>★別のお年寄りが、「もう、先は長くないよ。」と言ったら、「そんなこと、ないよ。がんばって。」とさらりと答えた。オレンジとグリーンの花を手をしているお年寄りに、「おばあちゃんかわいい。似合うよ。」とにこにこ声をかけていた。</p>
--	---	--

☆ 2回目のボランティア体験活動直後のBさんの感想

・今回は2回目というのもあったので、この前よりは慣れてきた。だから、けっこう楽しかった。とくに楽しかったのは、花を作っているときに、おばあちゃんといろいろ話をしたりしていたのが1番楽しかった。

・歌をうたっている時に、泣いているおばあちゃんがいる、そのおばあちゃんを見てたら、すごく×100うれしかった。

・「ぞうり」をくれたおじいちゃんとか、元海軍のおじいちゃんとかがいる、いろいろなカッコいいおじいちゃんとか、おもしろいおじいちゃんとかたくさんいると思うけど、全部の部屋をまわれなかったのが、残念だった。今度もし行く機会があれば、全部屋を回ってみたい。

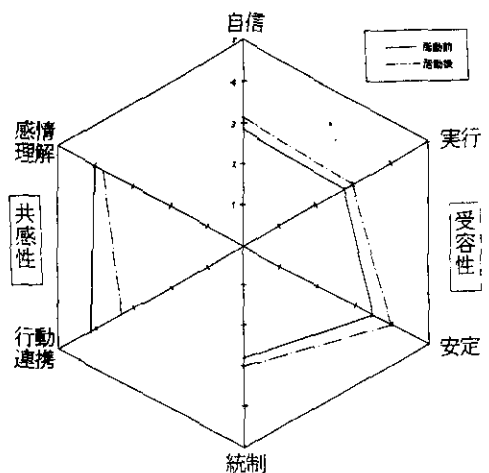
感想用紙の最後に「今度は自分で来てみたいと思いませんか？」という質問に、「機会があれば来たい」に○をつけていた。

◎活動後のBさん

追跡調査を実施し、「受容性・共感性尺度得点」について、体験活動の前と後とを比べてみると、受容性の4つの尺度の得点が全て活動前より活動後の方が上昇している。しかし、共感性については、2つの尺度の得点が共に下がっている。

活動後、遠足の副班長に推薦され、協調する姿が見られるようになり、交友関係も広がりつつある。体験を通して受容性が高まり、友人との関係が円滑になり行動する意欲も見られるようになってきたものと思われる。

Bさんの受容性・共感性尺度得点



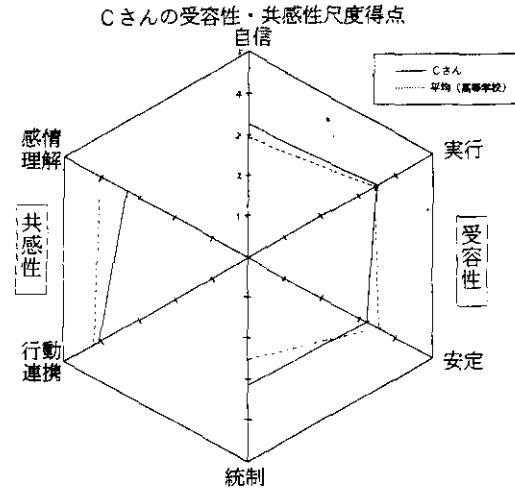
### 3. 高等学校の実践事例

高等学校では、授業の中での実践は困難な状況である。そこで、幸区の社会福祉協議会が主催した「福祉体験学習」に自主的に申し込んだ生徒に着目して、行動の様子を観察した。

○着目生徒Cさんについて [高等学校2年生, 女子]

祖父母との同居の経験はない。口数は多くないが行動的なことを好む。じっくり時間をかけて物事を考えたり細かい作業を行うことは得意な方ではないが、行事の時などにはてきぱきと作業を進める。中学校時代、特別養護老人ホームでボランティアをした経験がある。今回は保育園での体験を希望している。

調査結果の中から「受容性・共感性の尺度得点」を見ると、今回調査した高校生の平均と比べて受容性の「自立」「統制」は高いが、「安定」が低く、共感性については「感情理解」が下回っている。このことから、自分に自信をもちしっかりとした行動がとれるが情緒的にやや不安定で、相手の気持を理解することは苦手であるという姿が浮かんでくる。



#### 福祉体験の実践から

#### 幸区社会福祉協議会主催 「夏休み福祉体験学習」への参加

##### 【活動の経過と支援】

Cさんは、社会福祉協議会の呼びかけに応じて自主的に福祉体験活動に参加した。中学校時代にボランティア体験があったCさんは、それほど抵抗なくこの福祉体験活動に参加したようである。今回の福祉体験活動は、特別養護老人ホーム、障害者施設、保育園の3つの施設の中から、自分のやってみたい活動を選んで申し込むようになっていた。申し込む際に、自分のやりたい活動を選択できたことが、後の活動意欲に大きくつながっていたと思われる。今回、Cさんは保育園を選んだが、高校生として将来の職業選択のこともあったようである。担当者の話を聞くときの態度や発言から、活動の意欲が高いことがわかる。

実際に保育園での体験活動が始まると、最初は緊張して話もできず戸惑っていた。受容性の「安定」や共感性の「感情理解」がやや低いことから、相手の気持ちを理解して周囲にすぐに溶け込むことが苦手なのではないかと思われる。しかし、時間がたち園児とふれあう中で表情も柔和になり、園児の気持ちを考えた言葉かけや行動がとれるようになってきた。一緒に動いて園児の活動を促したり、助けたりすることができるようになった。2日間の保育園での活動を通して、「園児の心によりそう」という自分なりの目標を達成でき、満足感を得たようである。

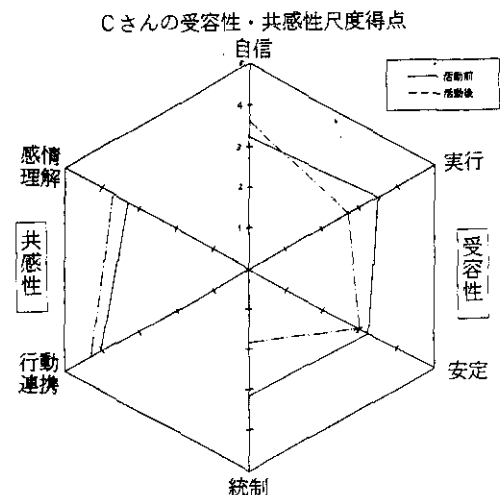
主な活動	保育園職員による支援	着目生徒Cさんの様子
一日目 <幸区福祉パルでのオリエンテーション> ・三日間の日程説明, 自己紹介, ボランティアについての講演, 施設毎に分かれ担当者の話と質問, グループ毎に目標を話し合い模造紙で発表などの活動をした。		
[二日目] <T保育園での体験> ・園長先生から説明を聞く。	・具体的な園児への声のかけ方を、例を出して話し、Cさんに分かりやすいように話した。	★5歳児の担当を希望し、真剣な表情で説明を聞いていた。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当の教室で園児に自己紹介をする。</li> <li>・園児の中に入り、一緒に遊ぶ。</li> <li>・保育さんが伴奏して歌をうたう。</li> <li>・絵あてゲームや絵の具遊びの手伝いをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育が始まってからは、活動に集中できるようにできるだけ声をかけない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★緊張気味に挨拶をした。</li> <li>★緊張していて、会話がなく戸惑っている様子。</li> <li>★園児が遊んだ道具を片づけるのを手伝い、箱の中に積木を入れた。</li> <li>★照れながらも、園児とともに「おぼけなんかうそさ」を歌った。</li> <li>★園児のアイスクリームの作品を見て、食べる真似をして「あーおいしい」と言い、「きれいだね」「かっこいいね」とほめた。</li> </ul>
<p>三日目</p> <p>&lt; T保育園での体験 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・散歩から帰って来て、自由遊びの手伝いをする。</li> <li>・流し場で洗い物をする</li> </ul> <p>・お別れの挨拶をする。</p> <p>・園長先生を交えて、反省会をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「また、遊びに来てね」と声をかけた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★園児と手をつないで、にこにこしながら帰って来た。</li> <li>★数人の園児と、「きれいに流そうね」とくつの泥を払う網のマットを洗った。</li> <li>★登り棒に登ろうとしている園児の助けをしていた。</li> <li>★男児に「そろそろもどらなくっちゃ」と、別れを惜しむように話した。</li> <li>★挨拶のあと、一人の園児が泣きだし、それを見て、寂しそうな表情を見せた。</li> <li>★「園児の心によりそう」という、自分なりの目標が達成できたと、満足そうに話した。</li> <li>★満足そうに微笑んで「はい」と答えた。</li> </ul>
<p>&lt; 幸区福祉パルに戻る &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験アンケートに記入</li> <li>・1日目の目標に対する反省をグループで発表をする。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>★反省用紙のレイアウトをCさんが作り、寄せ書き風にそれぞれが書き込むようにした。</li> <li>★「1週間位やりたかった。」と書いた。</li> </ul>

◎活動後のCさん

実践後に調査をし、「受容性・共感性尺度得点」について体験活動の前と後とを比べてみると、受容性の「自信」の得点は上昇しているが、他の3尺度の得点はいずれも下降し、特に「統制」「実行」ではそれが大きい。共感性についても2つの尺度の得点がともにやや下がっている。

活動後、体験活動を観察していた担任と素直に話せるようになり、クラス委員としても積極的に活動するようになった。学年集会では自分のボランティア体験を、皆の前で発表した。



### C. ボランティア体験活動実践後のボランティアにかかわる意識の変化

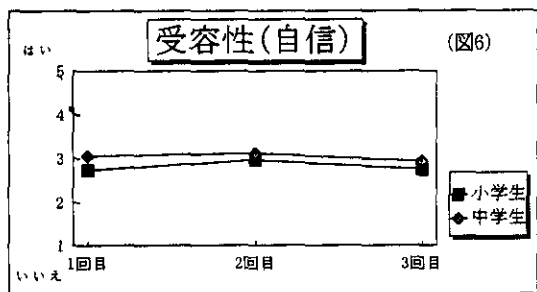
体験活動を行った小学校・中学校各1クラスを対象に体験後の意識調査を2回行い、継続して意識の変化を調べた。なお、意識調査と体験活動は、次のように実施した。

	小学校	中学校
4月	意識調査(1回目:事前)	
6月	・Iホーム訪問 ・ふれあい縁日	・Kホーム訪問(1)
7月	意識調査(2回目)	
11月	意識調査(3回目)	

意識調査の1回目(事前)、2回目(体験1週間後)、3回目(体験の4ヵ月後;中学生はこの直前にKホームを2時間訪問)における尺度得点の変化を校種別に比較すると、受容性の「自信」「実行」と共感性の2つの尺度、さらにボランティア活動としての認識で有意差がみられた。ここでは、それぞれ有意差の高い方の尺度についてみることにした。

#### ① 受容性について

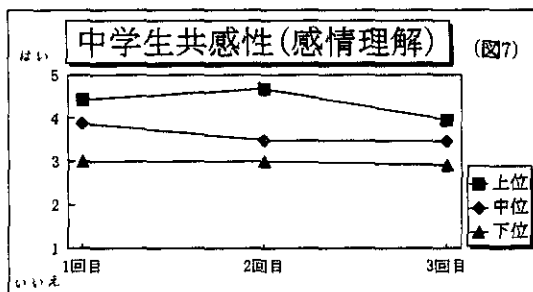
「自信」についてみると(図6)、小学生、中学生共に2回目で上がり、3回目で下がっている。これは、体験をしたことにより自信が生まれ、自分の意見をはっきり主張したり、自立した行動がとれるようになったりしたが、その後継続した体験活動を行わなかったために、それが定着するまで至らなかったと考えられる。男女別でも比べてみたが、同様の傾向を示した。



#### ② 共感性について

「感情理解」についてみると、小学生は2回目で下がり3回目に上がっているが、中学生は下降したままである。小学生では、「ふれあい縁日」の中で、お年寄りとお年寄りよりも、縁日を楽しむことを中心に活動する児童も多く、体験したことが感情理解の深まりにつながらず、2回目で下がったものと思われる。

下降傾向が見られる中学生について、さらに1回目の調査の上・中・下位群の3群で2回目・3回目の調査を比べたところ(図7)、2回目で上位群は上がっているが

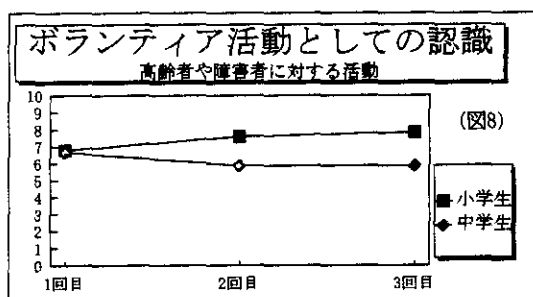


中位群が下がり、3回目で中位群は横ばいだが上位群が下がっている。1・2回目の体験活動で多くの生徒がお年寄りを思いやり援助する行動をとっていたが、特に上位群で意識の高まりにつながったようである。しかし、3回目の体験活動まで4ヵ月も経過してしまったことやお年寄りとのふれあいが少ない活動内容であったことなどが影響してか、3回目の調査結果は下がる傾向を示している。

当初の予想では、体験することによって意識が高まり定着すると考えていたが、一部の尺度を除き、定着したという結果にはならなかった。しかしながら、数値の低下は必ずしも意識が下がったということではなく、体験後の児童生徒の作文から見ても、体験を通して現実を見つめ逆に意識が高まったために、自分に対する評価が低くなったと考えることもできる。

#### ③ ボランティア活動としての認識について

ボランティア活動としての認識を「高齢者や障害者」に対する活動についてみてみると(図8)、小学生の値が2回目、3回目と上昇している。この傾向は「身近な人」や「不特定な人々」に対する活動でも同じようにみられた。ボランティア活動としての認識は、小学生において高まったことが示され、体験活動が認知的側面で効果があったと考えられる。



## III 研究の成果と今後の課題

### 1. 研究の成果

#### (1) 調査研究

「ボランティアマインドには、受容性、共感性が深くかかわっているであろう」という視点については、受容性、共感性とボランティア的活動経験との間に関連があることが示された。特に、受容性の「実行」「安定」の

尺度と共感性の2尺度は、いずれもボランティア的活動経験との関連が高かった。このことから、児童生徒が家族や友人との円滑な人間関係の中で安定した情緒を保ち目標に向かって取り組もうとすること、また、相手の感情を理解し、共感する姿勢をもつことが、ボランティアマインドの育成に大きく関係することが示唆された。

男女別では、受容性、共感性ともに女子の方が高く、相手を理解し思いやる傾向がみられた。ボランティアマインドと学級・家庭の受容的環境との関連については明らかにできなかった。

## (2) 実践研究

今回は、様々な体験活動の中から、福祉体験活動を取り上げ、実践した。自分と異なる年齢や状況にある人とのふれあいは、児童生徒の心を変化させた。当初、ボランティア活動に関心がなかったり、福祉施設訪問に消極的であった児童生徒が、体験を通して相手を思いやる表情や言葉かけ、態度を、様々な場面で見せるようになってきた。学級の様子も、それを反映して協力的で穏やかな雰囲気が生まれてきているようである。

児童生徒に対する支援については、日常生活や意識調査の結果からその状況を見立て、個々の受容性や共感性を意識した支援が大切である。体験活動に先立って、施設と連絡を取り、相手の立場を理解して十分に打合せを行うことも必要である。そして、施設職員から直接話を聞いたり、簡単な体験を取り入れたりする学習を行って意欲・関心を高めることや、人とのふれあいを多く取り入れ、体験を通して成就感や達成感を実感できるような活動を設定することが重要である。また、活動の状況に応じた適切な励ましや、活動の様子を評価し、自分が活動したことの価値に気づかせるような言葉かけがさらに意欲を高めることになる。

## 2. 今後の課題

ボランティアマインドは、短期間の体験で育成されるものではなく、継続した活動や日々の生活の中での実践を通して育っていくものである。今回の体験活動は、時間が短く、内容もお年寄りとのかわりが少ないものであり、回数も少なかったことから、意識の定着化を十分に図ることができなかった。

今後は、「総合的な学習の時間」の創設により体験活動の設定がより容易となる。そこで、この時間を活用して児童生徒が様々な人とふれあいかかわる体験活動を設定し、時間をかけ継続して行うことができれば、ボランティアマインドの育成に大いに寄与するものと考えられる。

体験は、児童生徒の心に様々な波紋を投げかける。体験後の心の育ちをどのように支え、ボランティア活動に結び付けていくのかということも今後の大きな課題である。

## 《おわりに》

体験活動をしている時、児童生徒が相手を思いやり生き生きと活動する姿は素晴らしいものであった。一生懸命おむつ巻きをしていた男子生徒が、「俺って、今日役に立ったよな。」とふと言った言葉とすがすがしい笑顔が体験活動の意義を物語っていると思う。

意識調査にははっきりとは表れなかったが、児童生徒のボランティアマインドは、体験活動を通して少しずつ育っているのではないかと思われる。

最後に、意識調査や実践に協力していただいた研究担当者所属校の先生方、児童生徒の皆さん、そして快く児童生徒を受け入れてくださった福祉施設・社会福祉協議会の職員の方々、さらに、お忙しい中、細かい点にまで丁寧にご助言をいただいた指導助言者の先生方、また研究の当初より最後まで親身になってご指導いただいた横浜国立大学の岡田守弘教授に心から感謝の気持ちを表したい。

### 【参考文献】

加藤隆勝・高木秀明

「青年期における情動的共感性の特質」

筑波大学心理学研究 1980年

菊池章夫 『思いやりを科学する』

川島書店 1988年

金子郁容 『ボランティア もうひとつの情報社会』

岩波書店 1992年

板津裕巳

「自己受容性と対人態度とのかかわりについて」

教育心理学研究42巻 1994年

加藤久美子ほか4名

『他者を尊重する意識の高揚と実践力を育む児童生徒指導の研究』

川崎市総合教育センター 1997年

上杉賢士・田中雅文

『中学生にボランティアスピリットを育てる』

明治図書 1997年

### 【指導助言者】

横浜国立大学教授

岡田 守弘

(川崎市総合教育センター専門員)

川崎愛泉ホーム

牧岡 英夫

前川崎市立小学校児童指導研究会長

本間 千尋

(川崎市立下河原小学校長)

前川崎市立中学校教育研究会生徒指導部会長

(川崎市立東高津中学校長)

松田 滋充

川崎市立小学校児童指導研究会長

竹林 浩一郎

(川崎市立白山小学校長)

川崎市立中学校教育研究会生徒指導部会長

(川崎市立野川中学校長)

佐藤 剛